

平成21年度第2回小金井市立はけの森美術館運営協議会

開催日時 平成22年1月29日（金）午後6時～8時10分
開催場所 小金井市前原暫定集会施設1階 A会議室
委員 出席：鉄矢悦朗会長、千村裕子委員、淀井彩子委員、
鈴木茂哉委員、豊岡弘敏委員
事務局 出席：薩摩雅登学芸顧問
大野 玲学芸員、神津瑛子学芸員、加藤みつこ学芸員補
鈴木雅子文化推進係長、天野達彦事務担当

【鉄矢会長】 お待たせいたしました。では、定刻を過ぎましたので、これより平成21年度第2回小金井市はけの森美術館運営協議会を開催したいと思います。

まず、配付資料の確認をしたいと思います。配付資料、議事次第、それから21年度の事業実施状況について、新収蔵品についての報告、予算内訳、それから横長の入館者数調べ、次第含めると5点、これでよろしいですか。お手元にありますか。

では、議事内容に従っていききたいと思いますけれども、その前に新しい事務局のスタッフが入ったということなので、まず紹介を。自己紹介でいきますか。まだ1回もやってないでしたね、運営協議会で。ですので、まずお願いします。

【加藤学芸員補】 7月からなんですけれども、学芸員補として、本年3月までやらせていただきます加藤みつこと申します。よろしくをお願いします。

【鉄矢会長】 それから、豊岡委員が。

【豊岡委員】 豊岡でございます。4月から小金井市で指導室長としてお世話になっております。前回はちょっと欠席をさせていただきました。参加をして、一緒に考えていきたいなと思います。よろしくをお願いします。

【鉄矢会長】 よろしくをお願いします。

では、議事内容のほうに入りたいと思います。

21年度の事業実施状況について。その前に、すいません。議事録。前回議事録は、皆さんの手元に送ったのか。送ってあるものの中にありましたので、その中で、不具合があったり、細かいことがありましたら、事務局のほ

うにお願いいたします。期限は今日までなんですか。

【事務局天野】 あれば後日、早めをお願いします。

【鉄矢会長】 では、議事のほうに移って、美術館の運営について、21年度の事業実施状況についてお願いいたします。

【大野学芸員】 では、学芸員から報告させていただきます。

きょうは、鉄矢会長からぜひ映像を使うようにとお話ありました。私はコンピュータの操作がありますので、すみませんが、こちらに移動します。

平成21年度の事業実施状況についてですが、事前資料の中に、企画概要をまとめる形で、企画書のようなものを入れて送付させていただきました。こちらに詳しく書いてありますので、趣旨や内容については今ここで細かくはお話ししません。ここでは実施の報告という形で、結果報告を中心に簡単に話させていただいて、後半の22年度の事業の予算ですとか事業計画のほうに、なるべく時間を回したいと思っております。

まず、田中絹代展です。事前資料と、きょうお配りしています資料1と、両方あわせてご覧いただきながら、画像も見ていただけたらと思います。

この展覧会は神津学芸員が担当しました。このように、女優の田中絹代を中心にしつつ、大岡昇平の『武蔵野夫人』にちなんだ地域振興を兼ねたイベント型の展覧会です。このように、当館では初めて、着物の展示なども行いました。油絵の作品も展示しています。こちら会場風景の画像です。

展示全体としては、スチール写真、映画ポスター、遺品類が中心です。あと、ここ、バナーがつってあるのが映っていますけれども、展示デザインとして初めて、バナーを展示室の中につるしました。バナーの向こう側が武蔵野コーナーで、はげの地域の説明のパネルになっています。

こちらの画像は、地元の富永一矢さんにお問い合わせした参考展示、大岡昇平が逗留していました当時の富永家の模型です。

こちら大きく展示ケースを映しています。当美術館に展示ケースはありませんので、今回、市の文化財センターから展示ケースをお借りしました。市内の文化施設と連携して準備を行ったということで、報告させていただきます。それからバナーや大きなパネルなどの出力は全部、デザイン協力いただいた東京学芸大学デザイン研究室にお願いしています。

こちらはロビーの様子です。ここもデザインは全部、東京学芸大学のデザイン研究室の正木先生と学生さんが監修しております。

【鉄矢会長】 私の隣のデザイン室ですね

【大野学芸員】 また今回おもしろい展示として、プロマイドのマルベル堂に協力を得たプロマイドの歴史のパネル展示です。ほかに、下関市にあります田中絹代ぶんか館の解説や紹介をパネルで展示しました。

こちらが正面玄関の様子です。ここは外玄関の扉にありますポスターを貼るスペースですけれども、今回初めて、東京学芸大学で大きな出力機でケースサイズぴったりに、大きいポスターをつくっていただいて貼りました。こういうデザインの一つ一つのレベルアップが、展覧会に、通りすがりの方でも入ってみようかな、というふうになるんじゃないかなと思います。実際、今回、デザインがよかったので、気になって入りましたという方が多かったです。

きょう、お配りしました資料に、入館者総数合計1,085人と書いてあります。短期間の展覧会でしたけれども、予想以上に人が入ったのではないかと思っています。詳しい内訳ですとか、1日平均人数ですとかは、資料をお出ししていますので、後で事務局の天野から説明させていただきます。

それから今回は内覧会がありましたので、少し画像でご報告いたします。

まず館長がごあいさつをしております。こういう感じで。また、市長からも、地元の振興につながる展覧会だということで、ごあいさつをいただきました。その後、担当の神津学芸員のほうから、簡単に展覧会の案内をさせていただいて、こちらは東京学芸大学のデザインを担当した学生さんを紹介しているシーンです。

お客さまはこんな感じで、それなりににぎわっていました。33名出席ということで、ふだんより少し多かったように感じます。地元の方が多く来てくださいました。こちらが市長とゲストキュレーターの河波様です。こちらは担当学芸員の神津と東京国立近代美術館の学芸員の方です。ちょうどこの時期に前後して、田中絹代の展覧会を国立近代美術館フィルムセンターでもしておりまして、その担当の学芸員の方が内覧会にいらっしゃいました。内覧会を通して、他館の学芸員と交流が持てたというのもよかったです。

それから、事前資料の企画概要、また以前の運営協議会でも報告しましたように、この展覧会ではイベントがたくさんありましたので、こちらにも画像をご覧ください。

まず、こちら台本を読む企画、「スター☆なりきり朗読会～映画台本を味

わう～」の様子です。美術館の2階の応接室を使って、『お琴と佐助』の台本、こちら台本の画像ですが、これをプリントして配って、台本を読みました。こちら講師の先生と参加者です。

こちらは「はけ美でシネ恋ナイト」、2日間限定で、展示室で映画上映会を行いました。こういう感じにスクリーンを立てまして、椅子を展示室に並べて、人数限定申込制で上映いたしました。これも非常に盛況で、やはりこの場所、はけの森で田中絹代の『武蔵野夫人』を見るということが、とても受けたようでした。

それから、こちらは遠足の企画です。これは大変な……。まず西国分寺駅に集合しています。それから『武蔵野夫人』ゆかりの道を通りながら美術館に戻ってきます。これは担当学芸の神津と市の文化財センターの多田学芸員です。文化財センターの多田学芸員は「はけ」や『武蔵野夫人』のゆかりの地名などに詳しいので、今回講師をお願いしました。初めてこうやって外での遠足企画で、真夏だったのですが、夏の日差しを受けながら……恋ヶ窪駅から戻ってくる形です。要所要所で集まっては、解説を聞いて、小金井のはけですとか野川の自然、文化に接し、帰ってくるということです。こちら貫井神社でしょうか。神主の方に少し話を聞いております。ここも『武蔵野夫人』の小説の中で出てくる、こちらじゃないかというシーンがあるので……。こちらは市のコミュニティ文化課の職員ですけれども、職員総出でスタッフとして入ってやっております。

こちらは滄浪泉園、こちらは金蔵院です。こうやって歩いて、お昼は途中の三楽集会所でお弁当を食べて、午後に美術館に戻ってきました。で、このように美術館待機のもものがお帰りなさいと迎えて、ロビーで最後に、また話を聞いて、展示を見るという企画でした。非常に楽しんでいただけました。

田中絹代展についての画像報告は、以上です。それから、お手元の資料にあります「特別講演～富永一矢氏を迎えて～」という関連企画、こちらは8月15日に開催し、44名参加で非常に盛況でした。44名が入る講義室は美術館にありませんので、徒歩5分ほどの野川沿いにある集会施設を借りて、そちらでまず講演会を、ですので、そこから歩いて展示室にまた戻ってきて、展示を見るという企画でした。

このように、非常に盛りだくさんの企画の絹代展だったのですが、おかげさまで、来館者の方には喜んでいただけたんじゃないかなと思います。

では次に、この後開催しました所蔵展について画像を使いつつご報告します。これは以前にもご報告しましたように、比較的短期間の所蔵展ということもあるので、少し思い切った工夫をしてみようと。「アトリエおもちゃ箱！」という展覧会名で、会場をこのように、仕切り壁を出さずに広くとった、見晴らしのいい奥のところに、常設のワークショップコーナーのようなものをつくって、常に展示室で遊べるようにしました。

こちらは入り口の受付とエントランスの様子です。ポスターも、いつもよりちょっと楽しげなものをつくっています。ここに「本日無料開放日」とありますが、ちょうど10月の市制施行記念日に無料開放日を設定していますので、その日に撮影しています。昨年でしたか、年間の無料開放日を決めまして、中村研一の誕生日5月14日直近の休日と市制施行記念の10月1日が当館の無料開放日となっております。そういう日でしたので、わりと気軽に、ぶらっと立ち寄って楽しんでいただけたんじゃないかと思っています。

ワークショップコーナー、アトリエおもちゃ箱コーナーは、長時間遊んでいる方も……。こちらは、塗り絵ですね。展示室の中に本物の絵があって、白黒のコピーしたものを用意しまして、自由に塗り絵してもらいました。ごろんと寝転がって遊んでいらっしやいます。こういう展示室というのは、ちょっと珍しいんじゃないかなと思います。

子どもだけではなくて、ご年配の方ですとか、いろんな方が、ここで遊んでいられました。いつものように、土日にはギャラリートークもありました。8回開催、計77名参加となっております。この展覧会は入館者数1,315人でした。

次に、今、開催しております「ガラス絵～浜松市美術館の名品」展です。こちら、入館者数についてはきょう現在、最新のデータについて後で事務担当の天野から報告いたします。

この展覧会については、先週の日曜日24日に、NHKの「日曜美術館」の「アートシーン」で、30秒ほどの短いシーンですけれども、宣伝をしていただきました。その影響もありまして、今週は平日でも100人近い、100人を超える日もあったということで、非常に多くの方に入っていただきました。「アートシーン」の映像、ちょっとご紹介しようかと思ったのですが、うまくDVDが動きませんので、申しわけないですが次の機会に。

それから、後でご報告しますけれども、この展覧会では一般向けのワーク

ショップ以外に、市立の全小学校と連携して鑑賞教室を実施したというのが特に注目頂きたいところです。それはまた後で詳しくご報告します。

こちらは内覧会の様子です。内覧会でごらんいただいた委員の皆さんも多いと思うのですが、展覧会について簡単にご紹介します。

ガラス絵とはこのようにガラスに裏から描いた絵です。全て浜松市美術館からお借りしました。展示室には仕切り壁を1枚出しまして、2部構成になっています。このように、きれいに照明入っていますけれども、今回は照明委託料がついておりますので、プロの照明の方をお願いしています。ガラス絵ですので反射が強く、照明は難しかったのですが、きれいに当てていただいています。

こちらは、浜松市美術館からお借りしたガラス絵の制作過程をアクリル板で順を追って見せている参考展示物です。また、ポスター、チラシ等の展示デザインのほうは、同じく学芸大学のデザイン研究室にお願いしました。

展覧会関連企画として、ガラス絵を描くワークショップを2回行いました。

まず1回目は特別ワークショップで、こちらは浜松市美術館でガラス絵を描くワークショップの豊富な経験のある学芸員に講師として来ていただいて実施しました。会場は美術館2階応接室です。この画像のように、こういう雰囲気の中で制作系のワークショップをするという美術館も珍しいかと思うのですが、皆さん、そこがおもしろいみたいで、リラックスして楽しんでくださいました。こちら準備の様子、こちらが浜松市の学芸員の方です一回の定員が10名、家族連れの方もいらっしゃいましたので、最大12人までを入れるという形でした。この部屋でワークショップをするには、12名でいっぱいだと思います。

内容としては、まず展示室のほうで講師の方に解説をいただきました。その後2階に戻って制作を始めます。制作時間は1時間です。これは、完成したところを撮らせていただいた写真です。裏からアクリル絵の具で描いています。ガラスに絵をかくというのは初めての方がほとんどだったんですけれども、皆さん、楽しんで、小学生も。これは最後に色紙を、光る色紙を後ろから貼っている作品です。実際、展示室にも、光る素材、青貝などを裏から貼りつけて光らせている作品がありますので、展示と制作がうまくリンクしている例です。こちらは家族写真を貼って上に、家族で行った田舎の風景を描いてらっしゃいます。これも、写真を張りつけた明治時代の作品が展示室

にありました。

さらに、せっかくですので、これを参考にして別の日に、私たち学芸スタッフが指導する形でもワークショップを実施しました。そちらの作品も、なかなかの力作がありました。

今回、画材にしましたガラスは、いわゆる百円ショップなどで手に入るガラス製フォトスタンドです。それにアクリル絵具で描いています。

こちらガラス絵展は今日、終了しました。次の2月は1か月臨時休館いたします。展示替えや、台帳の整理などをする期間です。その後に3月から、例年のように年度を跨いでの、今年度の最後の展覧会をいたします。そちらについては、資料としてお配りしましたチラシをご覧ください。「中村研一 自然の歌」という所蔵作品展です。

では次に、本年度の教育普及に関する事業を報告いたします。教育普及を活動理念の1つにしている美術館ですので、これはまとめて報告をしたいと思います。

まず、多摩島しょ子ども体験塾市町村助成金の助成をいただいた教育普及プログラム、ガラス絵展で実施した小学校との連携事業です。企画内容については事前資料でお読みいただいていると思いますが、市唯一の公立美術館として、学習指導要領でも明記されている美術作品の鑑賞、その学習の場を保障することが当館の大事な使命と考え、初めて市立の全小学校が参加して実施しました。

簡単に、鑑賞教室の画像をまとめましたのでご覧ください。

これは前原小学校です。徒歩で来ました。まず玄関前に集ってもらい、コートなど大きな上着を脱いでもらっています。よく美術館でやる鑑賞教室は、ワークシートや鉛筆などいろいろ手に持っているんですが、今回はガラス絵がケースなしで展示してますので危険ということもあり、また、子どもたちはワークシートを使わなくても、事前に授業でガラス絵制作をやっていますので、しっかり動機づけはできていてよくみってくれるだろうと、もう身軽になってほしいということで、そのまま何も持たずに、手ぶらで入ってもらっています。

30人ほどのクラスですので、15人ずつ2つに分かれて、学芸の大野と神津とがついて、グループになって展示を見えています。ただ、ずっと15人で固まっているわけではなく、可能な限り自由に、すでに授業で絵をかいて

きたり、これからかいたりしますので、それぞれが自主的な見方をしてほしいということもありまして、こうやって、たまにばらけて、また時々集まったりしながらみえています。こうやって1人でじっくり見る子どももいましたし、話をしながら見る子もいました。小グループで散らばることもありますので、作品の安全確保のためにも、大学生スタッフが数人入っています。これには助成金で取れましたワークショップ・アシスタントスタッフ謝礼をあてています。担任教諭・図工教諭・学芸員・大学生スタッフと大人の目を増やすことで、反対に、その分子どもたちには自由に、なるべく近づいて見てもらえるようにしました。

あと、こちらは2階の展示室をみている様子です。時間がある学校には2階の中村研一作品についても紹介しています。さらに時間があるところは、美術館裏手の美術の森緑地の見学を行っています。

こういうふうにしなながら、1クラスずつ、例えば3クラスある学校ですと、1日に3クラスが交代交代に順に来て、それを学芸員2人と学芸員補佐、あと学生スタッフ2名位とで対応していきました。美術館スタッフにとっては非常に負担はあり、忙しかったですけれども、必要なことですし、充実していたんじゃないかと思います。

ただ残念ながら、1校、もろもろの事情で来れない学校が出てきまして、そちらについては出張授業をいたしました。その際に招待券を配って、ぜひ来てねと。この展覧会についての案内をする出張授業は神津が行ってまいりましたので、神津から簡単にご報告します。

【神津学芸員】 ガラス絵の制作を授業でもしているし、もういいんじゃないかと思われなくて、ぜひ来てほしいということで、小さなカードをつくらせて行きまして、ガラス絵のカードと、ガラス絵ではない作品をまぜたカードでグループ分けをしてみようという授業をしてみました。

あとは現代作家のガラス絵作家じゃなくて、油彩画の画家のガラス絵作品などもありますので、作家のいつもどおりの作品とガラス絵の作品と、どちらもカードをつくらせて行って、同じ人がかいたんだと、後で話したりすることで興味を持ってもらおうかなということでした。

実際つくってから、その授業をしたので、こんな細かいのがガラス絵のはずがないとか、とても楽しんで、ぜひ見に行くというふうに言ってくれた子が多かったのです、よかったです。

【大野学芸員】 実際、後日、子ども同士で来たり、親御さんと来たりしてくれました。ほかの小学校でも、団体鑑賞で来た子どもが、帰ってから、おうちの方に話して、後日、兄弟や、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に、もう一回来てくれるというようなこともありました。小学校との連携事業についての報告は以上です。

次に、今年度から始まりました、展覧会とは関係のない教育普及活動について報告いたします。資料には「展覧会とは別立ての独立した教育普及事業①」とあります。これから2月には②を実施するのですが、まず実施済みの①の報告です。閉館中の広い展示室だからこそできること、展覧会とは関係がなていもいので幅広く、さまざまなタイプのワークショップをする、というのが、この別立ての教育普及事業の趣旨です。今回の内容については5月の協議会でも触れましたように、「きらきら☆えんげき」としまして、演劇の要素を使った企画、担当は神津です。

画像をご覧ください。まず、床をこうやってぞうきんがけしてもらって、きれいにして、場所をつくったりして、それから体を動かします。連続何回のワークショップでしたでしょうか。

【神津学芸員】 はい。全部で5回。打ち合わせを入れて全5回です。

【大野学芸員】 こちら、講師の先生です。特に、この展示室がL字になっていますので、このLのところで、角で出会うということをテーマに、即興でいろんなストーリーをつくっていきながら、それを拾い上げるような形で進んでいきます。だから、このように、みんな、この角で出会って、何か話をするというようなことを、即興で繰り返しをしています。そこから出てきたストーリーを拾い上げて、短いお芝居を作っていきます。

参加者の年齢層はこのように幅広く、学芸員も参加しています。

大分ストーリーができてきて、会話ができて、形に少しずつつながっていく。だんだん、みんな打ち解けてきて、これはもう最後ですかね、もう次回は発表会ですので、ストーリーをまとめているところです。最後にはこうやって絵をかいています。これは発表当日、舞台というか、会場に飾る絵です。

最終回の発表では、こうやって壁に絵を飾って会場を自分たちでつくって、家族の方ですとか、近所の方ですとか、大体20人、30人のお客さんが入っています。で、神津のほうから、この企画の趣旨について話しまして、講師の先生から、発表会の始まり始まりというような話があって、お芝居は大

体20分ぐらいで……。

【大野学芸員】 10分強ぐらいの短いショートストーリーです。

【神津学芸員】 お客さまとして、きょう欠席の宮村委員が。

【大野学芸員】 そうですね。で、発表のあと最後に講師の先生が、今回の成果などお話をくださって終わりました。美術館の中で体動かす、なかなかおもしろいワークショップだったと思います。

あと、別立ての教育普及事業②ですが、きょうの資料にはタイトルだけ書いて、チラシをお配りしています。事前資料には、簡単な企画概要をつけています。これが2月28日に実施予定です。

教育普及活動の報告として最後に、地域の教育機関、小学校、中学校などに対する学習の場の提供について、報告します。去年も受入ましたが、中学生の職場体験です。ことしは女子中学生が3人、職場体験に来ました。いろんなことをしましたので、こちら画像で紹介します。学芸員の仕事ですとか、受付ですとか、朝掃除から始まって、一緒にお仕事しました。ちょうど小学生の鑑賞教室にもぶつかったので、そのときはスタッフに入ってもらって、小学校の子どもたちと一緒に絵を見ました。最後のほうでは、こうやって自分たちで解説を、お客様の前でガラス絵について話をするギャラリートークをしています。自分たちで事前に勉強して、そして、こんな話をしたいと決めて、実際にお客様の前で話をする。こちら指導は神津が担当しました。

以上が今年度の事業の実施状況でございます。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。ただ資料だけを配られても、なかなかわからないので、きょう、今回、ちょっとプロジェクターがあるということなんでいただいたんですけれども、いかがですか。

【淀井委員】 わかりやすい。ええ。何かいいですね。

【鉄矢会長】 わかりやすい。長さとかは。もう少し短目でも、長目でもとか、こんな感じ、ちょうどいいぐらい。

【淀井委員】 そうですね。

【鉄矢会長】 でも、内容がよくわかりましたよね。

【淀井委員】 そうですね。よくわかります。

【鉄矢会長】 では、22年度事業について。

【大野学芸員】 22年の事業については、事前資料を見ながら進めますので、ご確認ください。まず、最初に挙げております企画展について、担当の

神津のほうから簡単に報告いたします。

【鉄矢会長】 資料「22年度事業予定および事業予算（内示）」というものでよろしいですか。

【神津学芸員】 では、神津から説明させていただきます。

「平成22年度企画展 企画概要（案）」としてなっているものなのですが、「新潟県新津美術館コレクションより 笹岡了一 抽象と具象の狭間に」という、仮称ですけれども、タイトルをつけさせていただいております。こちらは今、きょうで終わりましたガラス絵と、去年の松本市美術館の田村一男、そして、その前の京都市の堂本印象に続くものなんですけれども、開館以来、小金井市民も含め、都民ですね。東京であまり知られていない、現地までわざわざ足を運ぶことが少ない地方の美術館の中から、すぐれたコレクションを紹介するという展覧会を連続して企画しているもののうちの1つになります。

第4回目として、新潟市新津美術館の笹岡了一コレクションを紹介するという趣旨がございます。

笹岡了一というのは、ここに書いてありますけれども、中村研一と同じ光風会という絵画のグループに所属して活躍した画家になります。平成20年度、はけの森美術館で紹介した、こちらに書いてありますね。先ほども言いましたけれども、田村一男と同様、全国的な知名度というのがあまりない作家ではありますが、とてもすぐれた作家、個性的なユニークな画業を残している画家になります。公立美術館の活動としてふさわしい企画ではないかと考えております。

この新潟市新津美術館というのが、新潟市との合併によって市が変わったことによって、現在の館名となっているんですが、もともとは笹岡了一が生まれた旧新津市ですね。新津市から秋葉に変わり、それからまた新潟が変わったという経過があるんですが、こちらは97年に開館した美術館になります。

中規模な市の美術館、はけの森よりも大分大きい美術館ですけれども、はけの森美術館との共通性を有している、市あるいは美術館同士の交流としても意義が深いのではないかと考えています。

笹岡了一という画家は、ほとんど知られていない画家ではあるんですが、独学で絵を学んで、若くして帝展に入選し、中村研一もそうですけれども、

戦争画を描いたというのが、1つ大事なことになっています。

タイトルになっている「抽象と具象の狭間に」というのが笹岡了一の言葉で、「抽象と具象の接点のようなところに何かあるのではないか」という言葉を残しておりまして、そこから拾っております。この何かというのが、抽象絵画というのは、あまり持続性がない、感動の持続性がないということを書いておりまして、やはり絵は具象だと言いながら、この笹岡了一という画家の絵というのが、どんどん抽象的になっていくという特徴がありまして、抽象的になっていながら具象に絵の本質があるということを書いているところが非常におもしろいなと思って拾っています。こちらの、そういったところから、日常と非日常のまざっている、混在している接点、狭間のところに彼の魅力があるのではないかといいところを紹介したいと思っています。

関連企画として幾つか挙げておりますが、ワークショップの「物語の絵を描く」というのも、「抽象と具象の接点」というところから考えたものになります。キリスト教絵画ですとか、そういった宗教的な主題が多いんですが、物語から絵をかくということで何点かかいておりまして、そこからも、ちょっと、絵を描くワークショップというのは非常に楽しいというのが、今回、ガラス絵でも感じたことの1つでもありますので、何か想像して絵を描くですとか、絵から物語を想像させるといったワークショップができないかと考えています。

また、この「秋元由美子氏講演」と書いておりますのが、笹岡了一の娘、自身も画家である秋元由美子氏という水彩連盟に所属している方なんですが、この方が何度か当館へ足を運んでくださっております、ご自身が画家であるということもありますし、今も笹岡了一という画家の元アトリエだった場所が、ちょっとした市民ギャラリーのようになっているんですけども、こちらのすぐそばの元自宅というか、笹岡了一が住んでいたところに今も住んで、絵をかいているという方に当たります。何かいろいろな視点から、講演というか、笹岡了一の画業を語るということができないのではないかと、仮に考えております。

3つ目が、公開シンポジウム「画家のアトリエと美術館」と書いておりますが、こちらの今言った元アトリエなんですけれども、実は中村研一のアトリエ、今はないですけども、自宅とアトリエをつくったというか設計した

設計士と建築家が同じということで、佐藤秀三氏という、佐藤秀工務店と言われますけれど、こちら同じ設計士、同じ建築家のもとでつくられたアトリエという、ちょっとそういう共通点に注目したシンポジウムができないかと考えています。2007年に行った公開シンポジウムで、「小さな美術館からの声」というものが、「堂本印象展」を開催しているときに行われましたが、そちらの続きというか、もう一つ何か違った視点でできないかということで考えたものになります。

画家がいた場所、画家が実際に絵をかいた場所で、その絵を今も見ることができるといふ特徴が個人美術館の特色の1つとして大いに強調するべきだという認識が、この前回のシンポジウムであったと思うんですが、こちらを受けて、アトリエ兼住居というものが今後どうなっていくべきか、いろいろな視点で考えることができるのではないかと考えています。

作家のアトリエや住居が現存していることという社会的な意義ですとか、文化的な資産、作家の研究、個人美術館というものが元作家の自宅、アトリエだった場所から、どう影響を受けたりですとか、今後どのような改修などをしていかなければいけないのかなどを考える場となればよいのではないかと考えています。

本展覧会については、日本芸術文化振興会の芸術文化振興基金助成事業に申請中です。

そういったこともあって、盛りだくさんの企画を今の時点で考えていますが、まだ仮ですけども、こういった形で22年度の企画展というのを進めたいと思っています。

【大野学芸員】 このまま進めていってよろしいですか。最初にご説明すべきだったのですが、来年度は展覧会3本で考えております。所蔵展が7月から9月に1回、その次に、年を越して1月まで、今ご報告しました笹岡了一展、最後の年度末に特別展として5周年展をする、この3本で考えております。例年の4本ではなく、3本です。

では私から、年度末に開催する予定の特別展、「開館5周年記念展」についてお話しさせていただきます。

「小さな美術館からの声～中村研一と共に・5年間の歩み～」というのを仮の展覧会タイトルとして考えております。

前回の運営協議会では、5周年記念展として中村研一の特別展がしたい、

については、すでに作品調査を行っている中村研一の出身地福岡県から作品を借りて展覧会がしたい、というようなお話をいたしました。そのためにも展覧会を3本にし、予算を工夫をしたいと。しかし、やはり九州から作品を運んでくるというのは非常に経費がかかりまして、あと、新しいカタログをつくるかということも、ちょっと現実的に無理ではないかとなりました。前回の協議会でも、鉄矢会長からも話ありましたように、そのように中村研一の特別展をするのも大事だけれども、5年間の活動について振り返るような、これまでの教育普及活動も含めて振り返るような展示もいいのではないか、というご意見もいただきました。その辺も踏まえまして、中村研一を紹介しながら、5周年にあたり活動を振り返るというものに内容を変えています。

企画書の趣旨・内容をご確認ください。まず、この記念の年に当たり、もう一度、市民の方々に当館のコレクションについて知っていただきたいということで、コレクションの優品を紹介します。ですので、特別展なのですが、所蔵品も展示します。

それから、この5年を振り返るに当たり、まず紹介したいのが、最初の開館記念展「中村研一回顧展」です。なので、このときの出品作を中心に、もう一度、都内数館から中村研一作品を借用し展示します。

さらに、5周年を記念するという意味で、東京国立近代美術館から中村研一の代表作の戦争画《コタ・バル》などをお借りして、戦争画を特別展示したい。後でご紹介しますけれども、実は今年度、新収蔵品がありました。そちらも中村研一の戦争画に当たります。ですので、これのお披露目も兼ねまして、戦争画の大作を特別展示したいと考えています。

最後に、5年間の歩みを振り返るパネル展示です。今、神津からも話がありましたシリーズ企画、全国の個性的な美術館やコレクションを紹介する展覧会を、「京都府立堂本印象美術館展」、「松本市美術館田村一男展」、あと今開催している浜松市の「ガラス絵展」、そして来年度開催予定の新潟市新津美術館コレクションの笹岡了一作品を紹介する展覧会と、4年間連続して開催しています。このシリーズをパネルで紹介する展示をしたいと考えています。また当館の特徴や個性を紹介する展示として、先ほどありました佐藤秀三の代表作でもある、当美術館の現喫茶棟、旧中村研一邸と茶室「花侵庵」についての写真や解説パネルを展示する予定です。あわせて「新潟市新津美術館 笹岡了一展」の公開シンポジウムの成果などもパネル展示したいと考

えています。

関連企画として公開シンポジウムも考えています。2007年に開催しましたシンポジウム「小さな美術館からの声～市民とともに歩む今とこれから～」を引き継ぐ形で、しっかりしたシンポジウムを開催したいと思っています。

また展覧会図録は作成せず、おそらく展示作品半数ぐらいはかぶると思われる「中村研一回顧展」のカタログ、今、当館の所蔵展を紹介する唯一のカタログですけれども、こちらをもう一度紹介し、販売を進めるというようにしたいと思っています。

あと、この展覧会3本の予算については、予算の内訳の表を確認いただきながら、ご説明したいと思います。

【鉄矢会長】 では、議事のほうも、引き続いて予算のほうも入っていくのかな。入りながら。

【大野学芸員】 では、予算報告に入りながら内容をお話しします。

【鉄矢会長】 はい。わかりました。じゃあ、議事のほうの(3)に入ります。

【大野学芸員】 こちらの予算の内訳を見ていただきますと、網掛けにした欄が教育普及関連の予算になっています。展覧会に関連するものと、別立てのものがありますが、当館の活動の柱が教育普及活動ですので、まずこちらからご説明いたします。

まず、展覧会関連の教育普及事業としては、企画展、笹岡一展ですけれども、こちらで3つ、ワークショップと講演会と公開シンポジウム、この3本考えています。企画展笹岡展のところをごらんください。講演会講師謝礼が7万2,000円ついていますが、上向きの三角がついて、「2人分に」と書いていますが、欄外下に参考で書いていますけれども、この上向きの三角というのは、前年度に比べてアップの部分です。前回協議会で、予算の数字だけを見てもわからない、増えたのか減ったのかとか、柱である教育普及にどれぐらい総額使っているのかとか、そういうのが見えるようにまとめてほしいというご意見がありましたので、それを参考に三角印をつけています。

つまり笹岡展に関しては、講演会講師謝礼がアップという意味です。ワークショップ講師謝礼ですとかというのは例年どおりです。シンポジウムパネリスト謝礼分の予算を取っていますけれども、これはまるっきりの新規です。黒い丸は新規の意味です。

次に、特別展、5周年展ですけれども、こちらも予算表の網かけになっている部分をご覧ください。何も書いていない欄があります。それは、右のほうに23年度計上予算として抜き出してあるのと対応しています。というのも、この展覧会は年度またぎの事業になりますので、4月以降に実施するものに関しては、次年度の予算になり。なので、来年度予算には反映されていないんですが、再来年度に予算化する予定であるという意味です。

つまり予定としては、5周年特別展の講演会講師謝礼は、企画展講師謝礼と同じようにつけて、それから新規として、シンポジウムパネリスト謝礼をつける予定です。

また、バス借上料の欄をみてください。今年は市立小学校4年生がほぼ全校来ましたが、そのためには徒歩で来れない6校分の送迎バスが必要でした。今年度は多摩島しょ子ども体験塾の助成金で実施しましたが、来年はこの助成がなくなります。そのため市のほうで予算化しています。上向きの三角でアップになっていますのはバスが3台から6台になっているからです。ことしはバス代は3台分とり、6校ありますので1日に2校、ピストンで来ました。1日に何クラスも続けて来ますので、非常に大変でした。先生方も大変ですし、子どもたちの安全のことを考えても、作品の安全のことを考えても、このやり方を続けるのはいかななものかということで、来年は1日1校来れるように、6台分要求したため、アップになっています。

以上が展覧会に関する予算と展覧会に関する教育普及事業に関する予算についての報告です。

また来年も、展覧会とは別立ての教育普及事業も考えています。そのための予算を計上した分が、この表の別立て教育普及という欄です。

【鉄矢会長】 それでは、今、議事内容が(2)番の22年度の事業について、22年度の予算についてという両方が説明が終わったということでしょうか。では、それに関する質問、ご意見がありましたら、お願いします。千村委員。

【千村委員】 子どもたちがバスで何回も何回も来るのが大変だから、1回で6校分というようなお話ですが、そうすると来れないクラスとかがあるわけですか。みんな、その1つの学校の4年生の子はみんな来るわけですね。

【大野学芸員】 はい。

【千村委員】 わかりました。不平等なというのか、子どもたちが行けなか

ったりとか、行った子とかが何かね。みんな同じに見れると……。

【鉄矢会長】 ほかにご質問。私からいいですか。

運営協議会が年何回かやって開催されるといったときに、企画内容を、こんな企画しますよというのがあって、それを聞いてから、今回の会議、運営会議が開かれる予定だったと思うんですけど、やはりそのスケジュールは厳しいでしょうか。以前、年間でこのぐらいに運営協議会としてチェックしていったらどうだろうかという話をしたと思うんですけども、その中の1回分がどうしてもずれたと思うんですけども、今回。それが厳しいんだったら、何とか。何が厳しかったのか、言っているだけでやらないんだったら、ちゃんとそこを修正したほうがいいと思うので、ちょっと報告していただけますか。

【薩摩学芸顧問】 そうですね。それ、私、客観的に見ていましたので、私のほうから説明したほうが無難だと思いますので。

今回の活動報告を聞かれて、非常に私の目から見ても、事実上、非常勤の学芸員2人と事務1人で、いかに文化課のバックアップがあるとはいえ、非常に多彩なことをやっているんです。この美術館をつくるときに、いろんな議論はあったわけですけども、どのみち、この美術館の規模、あるいは立地条件、その他を考えたら、この美術館というのは、そんな3万とか5万とか、年間、お客さんを集められるとか、いわゆる利益が上がるとか、そういう美術館にはなり得ない。ですから小さくても個性的で、そして質の高い企画をやっていこうということと、それから、やはりちょうど小金井の中心に位置していますので、やはり子どもたち、それとの交流、それから、やはり研一が愛したはけの環境、自然環境との共生、それからほかの美術館、あるいは学芸大学、そういったすぐれた他機関との連携というようなことを、今年度はほぼ見事にできたというふうに思っておりますが、見ておりますが、その分、やはり大変、こんなんでいいのかというぐらい現場の方が忙しくて、どうも、この委員会のほうが少し先送り先送りになってしまったのではないかと、これは私は客観的に判断しております。

それから、もう一つは、むしろこれは改善できるんだと思うんですけども、この委員会の開催を決定するのが、だれであるかがはっきりしていないと。つまり館長なのか会長なのか。私は学芸顧問ですから決定権はないわけで、それとも事務局の側でなのか、その辺があいまいであったということも、

1つ、先送りになってしまった理由かなと思いますので、その辺はきちっと、今なり、今後決めれば、もう少しスムーズに行くのではないかと思います。この2点です。客観的に見ていまして。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

私のほうも、薩摩先生のおっしゃるように、やっている内容は、多分、皆さん、おそらくやっていると思うんですけども、それはそれとして置いておいて、この委員会が、私たちから手を離れて、また違う委員が入ってきて運営委員会をやっていくときの負担減にしたい。事務局側が、ある程度、こういうこととこういうことを運営委員会に付託するものですねというのが、理由がうまくルール化できると、その都度その都度対応していくような格好じゃない形にできればいいなと思っております。

今、薩摩顧問のほうから話があったように、一体この運営協議会はだれが開くのか、だれが音頭を取って開きますと言うのかというのは、会長である私なのか、委員でもありながら館長である鈴木委員のほうか音頭をとるのかということ、どうなのでしょう。ご意見。

【鈴木委員】 私も4月から館長ということで就任させていただいて、年間のスケジュールですとか、そういったものが、まだまだ未知な部分もございまして、今回、このような形で第2回ということで、美術館スタッフ一同、よくやっただいているなというふうには思っておりますが、年4回の予算措置をしている中で、ここでようやく2回目を開催したというようなことで、私、館長として委員の皆様には申しわけなかったなというふうには思っております。今後、会長とも、ぜひ私のほうと連携をとりながら、次回、いつ開催するのかといったことについて、十分、内部で煮詰めて、皆さんにお集まりいただくという方法を、今後考えていければなというふうには思っています。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

私の意見を言わせていただくと、多分、一番身近で全部を見て、スケジュールとか学芸員の様子を見ている館長のほうが、一応、音頭を取っていただいたスケジュールにさせていただくのが一番楽というか、動きはスムーズなような気がするんですけども。

そもそも企画の段階で話が聞きたいと前回か前々回に出てきたのは、私は多分、運営委員会としては、学芸員さんが何を考えて、どういうふうにした

いのかという、一番そこのところを共有できるものが、運営委員会としても、ちょっと言葉は変かもしれないですけど、あんた、言ってたことと、ちょっとやってること違うよという運営の方針の違いとか、やりたいと言っていたのは、この方法じゃなかったのか、そういう話が学芸員さんと話ができるとおもしろい、興味深いと同時に、親身になって美術館を考えられるということで、予算決まりました、企画はこれですというと、なかなか親身になろうと思っても、親身になるすきを与えていただけていないという気がするんです。ですので、この辺については、ぜひ来年度は一応は回数は前回のものを見てやっていただくつもりで、やっぱり来年も、どうしても合わない、そこのところのタイミングが、企画の段階をどういうふうにして運営委員会開くのができないというんだったら見直すような格好を考えるということではいかがでしょうか。そういう格好では。

【淀井委員】 そうですね。今もおっしゃったような、私たちは結果を聞かされて、そうですかということだけで、運営協議会というのに参加しているんですけど、何かいま一つおもしろくないというところがありますよね。おもしろくないというのは、興味が持てないという。残念なことですけど。これだけ一生懸命やってらっしゃるから、随分活性化されて、素晴らしいと思いますけれども、何も役には立てないわ、私たちみたいなポジションではありますよね。

【鉄矢会長】 なるほど。淀井委員も、もう少し働きたいとおっしゃっております。せつかくですから、多分、いろんな委員さんがいろんな脳みそがあって、それが全部入るとは思っていません。学芸員さんに、委員の言ったことを全部反映しろということは私は思わないんですけども、学芸員さんが思っていることに対して、意見があったことを理解することによって、学芸員さんの意見が強くなる。こっちで走りたいということのためには、どこを守っておかないと、どこに穴があいているかがわかるか、そういうことがわかるのかなと思って、あまり肩肘張らない企画段階の話が聞けると、運営の方向性とか聞こえるのかと。ただ、運営協議会というオフィシャルな部分で、どこまでそれが議事録に載ってやるのかといったときに、すごく厳しいかも。そうしたら、運営協議会ではなく、運営協議会の1個前の下打ち合わせ会みたいな格好で、運営協議会にしない形でやる方法もあるのではないかと考えます。ご検討いただければ。美術館全体でご検討いただければと思い

ます。

【淀井委員】 私たちが口を挟むことで停滞すると困るから、非常にやりにくくなるなどと思ってらっしゃるかもしれないですね。

【鉄矢会長】 もちろん、そう思います。ただ、一応、前々回のときの協議会の中で決めたものを、来年もちよっと踏襲していただいて、見直しはその次ぐらいに動きはなるかもしれませんが、やりましょう。私の質問が、すいません、開いちゃいましたけど、そんな格好で質問の内容を終わります。

ほかにご質問ございますか。

では、その他のほうの研一作品の寄贈についてに移りたいと思います。

これ、画像をお使いになる。

【大野学芸員】 少し。2枚ほど、せっかくですので、大きく見ていただきたいと思います。

本日お配りしました資料の中に、「新収蔵品についての報告 中村研一《シンガポールへの道》寄贈受入について」というものがありますので、見てください。

まず、こちらの作品の収蔵が決定しました経緯ですけれども、昨年の夏、中村研一作の戦争画について寄贈の申し込みがありました。この作品は、中村研一と福岡県立中学修猷館で同級生であった方の遺品として、遺族の方が所有されていまして。当時から中村研一の戦争画として文献資料が残っていますし、出品歴ですとか来歴も確かであることを確認しまして、学芸顧問と学芸員とで現物を調査しに参りました。その結果、寄贈受入希望作品として、ぜひ収集評価委員会に諮りたいということで、昨年末、12月25日に、はけの森美術館収集評価委員会を開催しました。その審議の結果、受け入れが決まりまして、今、手続を進めているところです。

なお、今回、収集評価委員会は委員の構成が新しくなりました。新しい委員の方については資料に書いておりますのでご確認ください。

《シンガポールへの道》については、資料に作品の基本データを書いてあります。制作年が1943年、昭和でいうと18年です。「サイン等」のところに書いてありますように、向かって左下に「K. Nakamura. 2603」というふうに書いてあります。2603というのは皇紀です。でするので皇紀2603年、西暦1943年と分かります。

当時の新聞にも記事が出ております。このように全く同じ作品です。中村

研一が絵をかいているところが、このように当時の朝日新聞に出ています。陸軍美術展に出す制作が進んでいる、という記事です。

1943年、陸軍美術展に出た後は、1972年に福岡県文化館でありました中村研一遺作展に出品されました。それ以降は出品歴はないんですけれども、このとき福岡では個人蔵として出品されました。その個人というのが、今回、寄贈の申し出がありました方の親族です。

資料には参考作品として、この作品の写真とともに、東京国立近代美術館にあります中村研一の戦争画の代表作である《コタ・バル》と、《コタ・バルB》と、《タサファロング》を載せました。《コタ・バルB》と《タサファロング》は、開館初年度に行いました「中村研一回顧展」に出品しています。このように、《シンガポールへの道》は、特に《コタ・バルB》と、ほぼ大きさも同じですし、人物をとらえるスケールも非常によく似ています。

資料3枚目に、委員会の議事内容を抜粋したメモをつけております。このように、ぜひとも収集すべき作品である、中村研一の画業において戦争画は避けて通れないし、この作品が収蔵されることによって、当館の所蔵品全体の厚みが増す重要な作品になるだろう、というふうに評価いただいております。

また当館には、《コタ・バル》のほかにも、この《シンガポールへの道》も含めまして、戦争画のエスキースがたくさんあります。ですので、そういうものを含めた展覧会を今後できるのではないかというようなご意見もちょうだいしました。最後に、せっかく新しい委員会の方々が集まっていたきましたので、当館の活動ですとか、そういうものについてのお話とご発言があった上で、委員会を終わっております。

この作品については、来年度の所蔵作品展でお披露目をするのか、特別展、5周年展のほうでお披露目するのか、両方に出すのか、まだ検討中です。私としては、なかなか戦争画出す機会が少ないですので、何とか機会をとらえて出せれば、回数は重ねてもいいと思っております。このような新収蔵品があったということを、今年度の事業結果として報告いたします。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。新収蔵品についての報告を受けながら、このはけの森美術館には戦争画のエスキースがたくさんあるという新しい情報が。

【淀井委員】 そうですね。すごいですね。

【鉄矢会長】 ぜひ見てみたいなど。

あと、我々の運営協議会も、美術館と一線を画して離れて見ていて、学芸員に対しても、いろいろ意見を出してきておりますけれども、またここで、収集委員会のほうからも、最後のページのところ、真ん中あたり、委員長ですね。委員長発言ですね。「常勤の学芸員がいないというのは大問題である。今後、対外的に責任所在を問われる場面も出てくるだろう。市の名誉、信用問題に関わる。多少無理をしてでも、この規模の美術館を持っている以上、最低1人でも、きちんと定められた常勤の学芸員を中心に運営していく覚悟を決めるべきだろう」というご指摘が出ております。そうだそうだと思っらっしゃる方は、ご発言をお願いします。

【淀井委員】 これ、本江さんがおっしゃっていますけれども、常識ですよ。

【鉄矢会長】 常識ですよ。相変わらず、継続して我々の、こういう運営協議会のほうからも、これは一定必要であろうという意思は変わっておりません。やはり責任の所在がないというのは、借り受けるということからしても難しいということが出ていますので、何とか、厳しい中でも維持しなきゃいけないものというものを、どういうふうにつくるか、ご検討いただきたいと思っております。

寄贈について、その他ご質問ありますか。

【千村委員】 質問じゃないですけども。

【鉄矢会長】 はい。ご意見。

【千村委員】 《コタ・バル》が展示されたときもそうだったんですけども、戦争画を描いたとか、描かなかったとかということは、戦争のときに生きていた画家の、いろいろそういう葛藤が大事な意味を持つというわけですけども、そのときに、この間の場合は、借りてきた絵が展示されたんですが、実際にそういうものの一部が寄贈されて、この所蔵の中に入るというのはすごく大きな意味というか、ほんとうに戦争の絵を描いたんだと、そういう時代の中で描いてきたんだということを、何とかきちんと証明というか、そういうきっかけにもなるということで、意味があるなど、とても思います。すごく素晴らしいことだなと思います。

それで、ほんとうにそれは中村研一が描いたのかという、それも問題にさせないほどの、そういうエスキースだけこっちにあって、それで本物の絵は

そこにあるということはわかっていたんですか。わかっていなかったんですか。どこへ行ったかわからなかったんですか。それはどうして国立美術館にあるようなものと一緒にならないで、別のところにあったという。変な質問ですが。

【薩摩学芸顧問】 戦争画の問題、いろんな問題もありますので、若干説明いたしますと、大戦中、軍が資金を出して、ほんとうにたくさんの画家が、たくさんの絵をかきました。その大半が、戦争が終わったときには東京都美術館だとか、それ以外にやはり個人で持っている方々もたくさんいらっしゃると思うんですが、東京都美術館に保管されていたものは、全部アメリカに接收されまして、また、アメリカが個人から持っていっているものもあります。あるいは、今失われている戦争画は、多分、戦争画を持っているということで、何か不利になることを恐れて、廃棄したとか、燃やしたとかというようなことも多分あったと思います。それで、ほとんどのものがアメリカに接收されて、それが戦後、国交が回復してから、やはり国へということで、現在では東京国立近代美術館に保管されているという状況なんです。ですから民間から戦争画が出てくるというのは極めてまれなことなんです。この中村研一の友人であった方というのが、大変成功した方で、中村研一についても援助していた方で、どうもその方の別荘のほうに保管されていた。自分が生まれたときからあるものですから、あまり意識せずに持っていたんだろうと思うんですが、だんだん様子がわかってきて、また、この中村研一美術館という活動が出てきましたので、どうも大事な作家の大事な絵らしいということで、こちらに話があったという、そういう経緯があります。ですから、多分、さほど、あまり大きく物を考えずに、別荘のほうに保管され、置いてあったということだと思います。

これは今、委員長言われましたけれども、非常に大きな意味を持っておりまして、戦争画、戦争画と言っていますけれども、これはまだ確かに、戦争画ではありますけれども、絵画の芸術、歴史も長いこと、戦争というのは、特にヨーロッパの油彩画を考えると、これはもう、もう一つの大きな使い方としてあるんでありまして、戦争画抜きにして彼の話は語れないという、そういうものです。

それからもう一つは、日本の近代の絵画の歴史は、実はこの戦争画というもののジャンルの中で、初めて、言ってみれば人間のものすごいドラマがか

かれています。それは戦争の場合もそうです。例えば、これがそうですけれども、これはもちろん戦争画かもしれませんが、ある一つの極限の状態です。ですから、時代がたてば、これは広い意味での戦争画、戦争を描いた絵画の歴史の中に、この絵だけではなくて、現在、日本にある戦争画に位置づけられておりますので、そういうときに、ほとんどの絵が国立近代美術館にあって、それ以外にあるというのは非常に数少ないですから、これは貴重なコレクションだと私は考えます。

【千村委員】 そうですね。そういう劇的な絵だと思うんですし、それを、この時期に受け入れて、この館の所蔵に入れるという、そういうすごい意味のあるものだと思うんですけど、そうすると、さっきも出てきたように、ちゃんとした学芸員の方が、ちゃんとフルタイムというか、いらっしゃらないという、そういう場面の中で、こういう重要なものの受け入れみたいなのが行われるということは、やっぱりあるわけで、やっぱりちゃんと市の美術館だし、これから歴史的に意味を持つであろうかもしれない、こういう絵を受け入れる、そういう美術館であるんだという格というか、それを持つためにも、ちゃんとした学芸員のいる美術館でなければならないというふうに感じますね。何かぼやぼやと、もやもやとしているのに、こういう重要なものが入ってくるという、何かそういったような違和感がありますね。

【鉄矢会長】 ほかにご意見は。では、その他の（２）番、入館者数等についての報告を。

【大野学芸員】 すみません。その前に、「22年度の事業予定および事業予算」について、報告し忘れたものが最後に2点ありますので。

資料の最後に『館報』と『所蔵品目録』発行のための資料データベース化作業と書いたところがあります。これについてですけれども、来年度、作業担当学芸員についての予算がつきそうですので、報告したいと思います。

まず、これまでの経緯を簡単にもう一度確認いたしますと、平成20年度に今の学芸員、大野、神津が来まして、学芸員全員が入れかわりました。そういうこともあるので、この年は企画展1本が限度、かわりに所蔵展3本というふうになりました。そのときに、企画展が減った分、所蔵品台帳の作成であるとか、調査研究などを進めようということになり、所蔵品の調査が進みました。

21年度も、その方向性を維持して、『所蔵品目録』の発行の準備に力点を置く方向で展覧会事業を構成し、東京都緊急雇用創出事業の助成を得て先

ほど紹介いたしました加藤が7月より学芸員補として採用され、現在『館報』や『所蔵品目録』発行のための整理作業を進めています。

これをうけて来年度どうするかというときに、この同じ緊急雇用創出事業に要する経費として、学芸員補ではなく、学芸員を申請することは可能だということがわかりまして、今これを申請しています。

来年は5周年ですので、これを機に活動をまとめ、『所蔵品目録』や『美術館報』を発行することを目指しています。これを担当する学芸員として申請が通りますと、学芸員が新規で採用され3名体制になります。学芸員体制に関する懸案事項に関わる大事なことですので報告いたします。

また資料の中で最後、来年度の調査研究費についてご説明いたします。

来年度、大きく変わるのは、特別旅費を伴う調査研究費です。当館の場合は、展覧会に伴う旅費はこれに当たります。これまで展覧会のときは、作品の借用と返却、それ以前に作品運搬などに関する調査打合せの、計3回分の旅費がついておりましたが、単年度予算ですので、それが全て開催年度の中に入れなければならない予算だったんですね。それですと、実際には展覧会準備に間に合わないということで、来年度は資料にありますように、翌々年度の展覧会のための調査、展覧会企画のための事前調査にあたる旅費を要求しましたところ、内示ではつきました。ですので、懸案であった調査研究部分の予算が、少し充実できたということをご報告させていただきます。

【鉄矢会長】 ご質問、ご意見。1年前から調査費がつくということは、非常勤は、その後1年、何年契約になっているのかということか、だれに予算をつけているのか、やっぱりこの辺が自己矛盾がちょっと出てきてしまうんだと思うんです。我々は美術館という研究機関がしっかり調査をしないとただの展示施設というものになってしまうので、やはりその調査費と同時に、安心して、その調査を真剣に迎えるだけの、受け取っていただけるだけの責任あるポジションをつくっていただくことを願うばかりです。

はい。では、入館者数等についての報告をお願いいたします。横長でいいですね。

【事務局天野】 お配りしたものについては、昨日現在の入館者数でございます。きょう、ガラス絵展が最終日で、きょうの時点のお話をいたしますと、1月の部分が、大人が814人で、前売券で入った方が814人でございますので、814人ということで、説明させていただきます。

それから、子どもの部分が34で、プラス前売り券で2名、36ということで、1月の合計が、きょう現在で850。今回は無料の方の合計数が391ということで、1月が1,240ということで、一番右の合計欄の6,651という数字が、きょう最終日のトータルが6,765というのが4月1日からの入館者数、きょう現在の入館者数ということです。

それから、2枚目等の部分については、所蔵展。2枚目、3枚目のものに関しましては、前回の委員会の際に、これまでの経過がわからないということだったものですから、今回は21年、20年、19年、18年ということで、逆の表示をしてございますけれども、展覧会ごとの入館者数の数値を表にしております。

数字につきましては、見ていただければと思います。

非常に雑駁ではございますけれども、入館調査のご報告は以上でございます。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。一番右の欄の合計数、入館者合計数というのが、18年から6,076とか、次は7,360、6,700と、ずっと数値が出ると、数値が気になっちゃうんですけど、展覧会の回数は減らしながら維持するということは、1回の展覧会で人が入ってきている。

【事務局天野】 そこら辺については、分析が非常に…。現実、展覧会につきまして、先ほど会長がおっしゃったように、展覧会の日数とか、あと内容とか、そういうもので、一概にというものは出さないとかですね。それから、中身、この数字がどういう意味を持っているかというのは、現実に基づいている資料があるんですけども。ただ、現実、今まで、18年の4月から開館して、これまで非常に市民の認知度が上がってきているということがございますので、この数字は右肩上がりに上がっていくというのは、あります。

【鉄矢会長】 いや、右肩上がりなのか、微増でいいのかと言うのが正しいかどうか、多分、昭和から平成になって、微増の時代が来ると思うんですけど、微増を怖がらない。

【事務局天野】 先ほどちょっと大野が話をしましたけれども、20年度の事業の中では、展覧会の回数は4回なんですけど、企画展が1本、所蔵展が3本という形で、展覧会の数は変わってはいないんですけども、内容が下がった……。下がったという表現が、いいか悪いかはあるんですけども、企画展1本減らして、所蔵展を1本ふやしたという意味においては、市民の反応というのもの。やはり企画展をすることによって、お客さんが多くなるとい

う傾向がございますので、そういう分析は大事なのかなと。

【鉄矢会長】 運営協議会の中では参考値として見るだけで、展覧会の内容と、我々が見に行って、やっぱり我々の目で見て、その空間が市の美術館にふさわしいかどうかというのを、まず大事に見ていきたいと思ひますし、この数値というのは、ひとり歩きしたり、縛られたりすると、ろくなことがないのは、皆さんはよくご承知だと思ひるので、伸び伸びと、今後もいい展覧会を企画して、推進するようになしていただきたいと、会長として思ひております。その他、ご意見ありますか。

【千村委員】 先ほどもお話が出たように、いろいろな企画、ほんとうに工夫して、もうびっくりするようなアイデアがあつたりして、ほんとうに皆さん、やっぱり若い人はすごいなと私は思つたんですけれども、それなりに大変だということもわかるんですが。

前回のお話し合いの中にも、生徒さんというか、中学生や高校生や大学生たちが興味を持ってくれるということが大事だみたいなことが出てきたように思ひますけれども、それで高校生はちょっと無理かなみたいな話が出たと思ひますけれども、私はこの地元に住んでいて最近感ずるんですけれども、小学生がやたら、「あした、はけの森だぞ」とか言つて、会話が聞こえてくるんです。「おまえ、行ってきたのか」とか何か言つてね。それでガラスの、「ガラスって、何かガラスにかくんだぞ」とか言つて、「ガラスって、丸く、プラスチックみたいな形のガラスからやるんだぞ」とかいう話とかしてるんですよ。だから、この地域の子どもたちが興味を持って、はけの森美術館の展示のこととか、はけの森美術館に行ったとかということが聞こえてくる、話題になるということは、やっぱりいろいろな企画が子どもたちにどんどん浸透してきているなというふうに、とても今年は感じたんです。それで、きょう、またここにいろいろ実際に映像で見たりすると、なるほど、子どもたちも興味を持つだろうなという感じがしました。

それから、とても私的なことなんですけど、私、自分の親が新津市、今は新潟市秋葉区の秋葉山という山のところの出身で、この新津美術館というのも、実家に帰るとよく行くんですけれども、新津市というのは、昔、しばらく前、石油がとれた。金津とか、新津とか、臭い津と書いて「くそうづ」というんですけど、そういう石油の出た地帯なんです。それで、みんな、すごいリッチで、それで美術館も、そういうふうなわけで、いろいろできたり、皆さん、

豪族みたいな人は、何々様と言われて、そういう人たちがいっぱい住んでいるんです。何様、何様というのは、石油で潤った人たち。今はみんな没落しちゃっていますけどね。そういうところの美術館から借りてきてやるというのは、私的な意味で、すごく私は、皆さんがよく調べて、そういうところからまで、いろいろ自分の地域の美術館に、こういうの。

【鉄矢会長】 新津美術館って、黄色いやつですよ。黄色くて、真ん中にステージが、こうあるやつですよ。

【神津学芸員】 今は黄色じゃなく……。

【鉄矢会長】黄色じゃなくなっただけですか。真ん中におもしろいステージが。私も縁があるんです。あれ設計した先生が。

【千村委員】 ああ、そうだったんですか。そんなで、すごく親しみも覚えたり、そういうところから借りてきて展示するっていう、そういう目のつけどころとか、そういう調査とか、そういうことがしっかり皆さんの中にあるというのを感じて、うれしいとか、自分の田舎で。

【鉄矢会長】 ぜひ、新津でも宣伝してください。

【千村委員】 そんな事を思いました。余談ですが。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

【豊岡委員】 学校の教育的なことでも話をさせていただくと、ことしのガラス絵に関する展示に関しては、非常に子どもたちが興味深く、ガラスに対してといますか、図画工作に対して取り組んだ姿があったのかなと思います。このようなことで、はけの森美術館と学校がこういう形で近づいていった取り組みみたいなものがさらに続けられるといいのかなというふうに思います。そこで、ちょっと見当外れのことかもしれないんですけども、私は住んでいるところ、板橋区なんですけど、前、勤めていたところが、前の前になるのか、練馬区なんですけども、ことしも先週まで、児童・生徒の作品展というのがマロンホールで開催されたんですが、私の今、話をした板橋区とか練馬区とかは、区立美術館で子どもたちの作品展を、つまり専門家の絵画の、プロの絵と同じ場所に掲示をして、親子で見に来たり、おじいちゃん、おばあちゃんで見に来たり、自分の作品が出ているということで、目を輝かして、そういった取り組みみたいなのも、会場提供といますか、そうすると、さっき言った、さらに小金井の子どもたちが、はけの森美術館に近づいていき、また違う機会をとらえて、興味、関心を持って見るというようなと

ころが出てくるかなというふうにも思いました。

もちろん、会場を使うという意味だと、これまでの作品展が、マロンホールでずっとやってきた経緯があるので、一概には、この今の私の考えがどうかというのは、検証してみないとわからないとは思いますが、そういったことを思ったのがあります。

それから、ことしは田中絹代展とかいう映画とのコラボレーションですよ。女優さんと『武蔵野夫人』、それから浜松市という。22年度は新潟市の美術館。だから、こういったコラボレーション的なものが、顧客といいますか、はけの森美術館は小さいけれども、認知させて、それは企画展なのかもしれません。だから、そういった意味で、もっともっとコラボレートできるものがないかというところと、さっき冒頭言ったような、教育振興の部分では、子どもをどう取り込んでいくか。もちろん、子どもだけではありません。市民をどう巻き込んでいくかというところが、これからはけの森美術館の発展といいますか、そんなことかなというふうに思っています。

もっともっと、だから、私も一委員ですけれども、会長さんがおっしゃっていましたが、それはできないよというものでいいので、思いつきで、どんどんどんどん、ここで何か話ができたりすると、もっともっと盛んになるのではないかと思いました。

長くなりましたけれども、感じたことです。

【鉄矢会長】 私からもちょっと。さっきから、ガラス絵のは、小学校何年生。小金井市全部。

【大野学芸員】 4年生。

【千村委員】 10歳です。

【鉄矢会長】 4年生。10歳ですね。

【千村委員】 ギャングエイジですから、結構大変な……。

【鉄矢会長】 ぜひ、市のほうのどこかの記録に、成人式ときのスピーチのときに、「君たち、ガラス絵やったね」と言わせるぐらい子どもを大事にする小金井市だっていいと思うんですよ。こういう全学年にやったなんていうことを、ほんのちょっとでいいから、成人式ときに、「覚えているかい？」と言って市長が言った。成人式には、どんな市長がやっているのかわからないですけど。

【千村委員】 10歳ですので、2分の1成人式をやります。みんな写真を

集めて、節目ごとのね。ちょうど4年生が、それです、今。

【鉄矢会長】　　こういうふうには、全学年やったというイベントが毎年あると、毎年、市長はスピーチのときにしゃべるネタがこうあって、さらに、それがすごくいい。よく、いいネタだと思うんです、文化的に。と、ちょっと僕は違う企画をしゃべらせていただきました。余談です。はい。その他、ございますか。

【鈴木委員】　　では、私のほうから。この運営協議会ですね。今回、開かせていただきまして、21年度の事業概要ですとか、来年度の予定の事業につきまして、各委員はじめ、事務局のほうからも一定ご説明をさせていただきました。今回、22年度予算ということで、財政当局のほうから内示が示されたところなんですけれども、今日の経済状況を反映しまして、非常に税収面ですね、数億円程度の規模で市財政減収になる見込みがあるというようなことがございまして、財政当局の我々が上げた予算要求に対する査定といったものが非常に厳しいものがあつたんです。

そういった中で、今回、事業費も一定の額を措置していただきまして、従前より正規職員の配置をとというようなことで、専門的な見地からも、皆さんからお話をいただいているところでもございますけれども、市を取り巻く環境、その他いろいろあるんですけれども、こういう厳しい財政状況の中で、昨年ぐらいからですか、時間外勤務手当のほう措置されたりですとか、そういったことで、一定前進を見ているのかなという思いはあります。

こういった皆さんのご意見といったものが、市民の皆さんが、素晴らしい美術館だというようなことで評価をしていただけるように、そういった内部の体制といったものも、当然、改善されていかなければならない部分であるということは、館長として、私も認識はしているところです。

そういった厳しい状況の中でも、今回の予算内示といった部分では、一定の確保はできたのかなと。5周年記念といったこともございますし、内部スタッフの創意工夫も非常にございました。来年度に向けても、職員一丸となって、はげの森美術館を運営していければ、市民の皆さん、小さな子どもたちにも喜んでいただけるのかなというふうには感じています。以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

【事務局天野】　事務局のほうから、予算の関係についての補足をさせていただきますと、今、館長が申し上げたように、事業については、私どもが要

求した額と比較すると、全体の税収が下がっているということから、若干切られている部分、減額されているということにはございますけれども、美術館の事業費につきましては、ほぼ要求したとおりの内示をいただいています。

そのほかに、美術館の建物とか、あるいは維持管理等について不足していると要求をしたんですが、それにつきましてはほとんど切られたと。ですから、市長も美術館の事業そのものについては認識いただいていると。それ以外の、残念ながら不足している部分についての維持管理という意味の部門については、先ほど申し上げたように、ことごとく切られたということがございますので、事業そのものについては一定の評価をされているんだらうと。それは過去、今まで築き上げたというか、頑張っけて築き上げてきた結果だなというふうには、担当のほうは思っております。以上です。

【鉄矢会長】 多分、どこの自治体でも、今、予算はどんどんふえるなんていうところはないと思いますし、その中で、こういう思ったことを何とかできる、皆さんの創意工夫でできる形にした。多分、この予算する側も創意工夫して予算措置をしたんだと思います。

ただ、それでよかったよかったと言えないのが運営協議会で、ぜひとも、そうではなく、さらにもお願いしたいというのも、やっぱりそれは継続して言わせていただくと。やっぱり、一応、ここで終わってから説明はこれで…。

【薩摩学芸顧問】 ちょっと1つ、お願いします。簡単にですけれども、中村研一の奥様で、この美術館を寄贈してくださいました中村富子様が102歳で天寿を全うされまして、それで、美術館の2階部分があいたという状況で、多分、来年以降ぐらい、この運営委員会で、これからの利用方法とかを議論しなければならないかなと思っておりますけれども、これも私はいろんな美術館知っていますし、客観的な目で見てみますと、多分、3つぐらいあるかと思えます。

まず1つは、これは美術館として寄贈されたものですので、これを勝手に市の会議室にしちゃったとか、改造しちゃったとか、それは寄贈された方のご遺志を踏みにじることになるんで、多分、そういうことはできないだろうと。とって、じゃあ、美術館にするといっても、それじゃあ、2階を大改装して、作品を展示するかというようなことは、多分これは市の財政その他考えても、そうする場合には、これだけきちとした建物として成立しているものを、改装できないんじゃないかと。ということは、やはり今ある最低

限の改修を前提に、これからの利用方法かなというふうに思います。

絶対的に足りないのが、1つは倉庫。収蔵庫なり倉庫。つまり、収蔵庫はありますけれども、もう手狭になっていまして、そして、展示器具や照明、各種印刷物、販売品の在庫そういうようなものを収納する倉庫と、それから、やはり、1階のあのスペースだけで全部の業務を行うというのは、いくら何でもこれはかわいそうで、あそこはやはり受付業務と簡単な応接室ぐらいにして、少なくとも学芸員の作業機能、あるいは場合によっては書庫機能を、もっと充実した学芸員作業室ができたらいいなというふうには思っております。このあたりを検討して、まず来年以降、どこかで、この委員会で、このことをお話しして、検討していただくことになると思いますので、よろしくをお願いします。

【鉄矢会長】 はい。ぜひ、その運営委員会の場合は美術館でやりたいですね。その場を見ながらやると、すごくリアリティーが出てくる。もし、ここでやると、みんな想像だけで論議してもわからないんで、ぜひ、館長、その辺はご配慮いただきたいと思います。

【鈴木委員】 はい。

【鉄矢会長】 では、はけの森美術館運営協議会、21年度第2回ですね。終了したいと思います。ありがとうございました。

先ほど発言しそうになったのは、やっぱり館長難しいですね。この本番にいて、しゃべる立場は。だから、前から出ているんですけども、館長は、やっぱりこの運営協議会じゃないところにいたほうが、ここで聞いている立場として説明するとか、何かすごく、この場に入っていて、受け答えが難しい位置だなと思って。

【鈴木委員】 果たして、この予算の話とかしても、私からしていいものか。委員の立場として。

【鉄矢会長】 そうですね。

【鈴木委員】 なかなか難しいなというのは。

【鉄矢会長】 うん。運営委員としては、もう少し何とかしてくださいと、もう一人の鈴木さんがあっちにいて、いや、そうはできないって言って、ひとり問答するような話になってくると、やっぱりでも、市立美術館というのは、そういう宿命なんですかね。

【薩摩学芸顧問】 いや、それはミスです。

【鉄矢会長】 ミスですか。

【薩摩学芸顧問】 事務局側の人が委員に入ってしまったと。

【鉄矢会長】 おいおい変えていきましょう。もっと発言しやすい位置に入っていて、しっかり覚悟して発言していただいたほうが、多分、さっきおっしゃった、いろんな会話ができるんだと思うんですよ。今、委員としてやってらっしゃると難しいところが。

【鈴木委員】 なかなか難しいですね。

【鉄矢会長】 どうもありがとうございます。すいません、今日。

【千村委員】 これについて、ちょっと。これ、小金井市は水と緑の小金井市とって、私、環境条例にちょっとかかわって、小金井の水というのはすごく貴重で、みんな、水のことは大事に考えているというのがあるんですよ。それで、この20人定員でってやったら、多分20人ぐらい来ると思いますが、環境市民会議にちょっと連絡して、美術館で水のこういうイベントしますって、この連携するのを、すごく意義があるんじゃないかなって思います。水。小金井と水というのをすごく重要に条例の中で取り組んでいくというふうになっているので、こういうところでもやるところを、連絡するだけでも、何かちょっと思いました。余計な話で……。

—— 了 ——